

14	岡崎	東海中学校	オオタ マコト
			氏名 太田 信
分科会番号	3	分科会名	社会科教育 (中学校)

1 研究テーマ

社会的な見方や考え方を働かせることを通して、よりよい社会づくりに向けた新しい価値観を実感する姿の実現
～中学2年「産業の発達と幕府政治の動きーなぜ町人中心の文化が生まれたのかー」の実践から～

2 研究テーマのとらえ

社会的な見方や考え方を働かせる…社会的事象を、位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係に着目して捉え、比較・分類したり、総合したり、地域の人々や市民生活と関連づけることであると考えます。
よりよい社会づくりに向けた…「よりよい社会」とは、そこにかかわる人にとって、幸せを感じられる社会（持続可能な社会）である。その社会づくりの為に、確かな社会認識のもとに問題解決を目指していこうとする姿をよりよい社会づくりに向けた姿と考える。
新しい価値観を実感する…新しい価値観とは、これまでの生活経験や既習の学習内容に加えて、仲間とのかかわり合いや追究を通して得た多面的・多角的な社会認識をもとに認識した、これまでの自分にはなかった価値観とする。その新しい価値観をもとに、改めて根拠をもって価値判断をすることが、新しい価値観を実感する姿であると考えます。

3 本研究実践を通してめざす生徒像

- 江戸時代に町人文化が発展した要因を多面的・多角的に考察し、文化の発展やその内容には、当時のさまざまな社会的事象が関連し合って表出されることを理解する生徒
- 江戸時代に町人文化が発展した要因の考察を通して、戦乱のない時代に政府はどこまで経済に関わるべきかという問題は、自由主義か保護主義かという問題として、現代も同様に考えるべきであるため、国民として社会参画の必要性について考える生徒
- 仲間とのかかわり合いを通して、新しい価値観を実感し、その実感をよりよい社会づくりに生かそうとさらなる追究意欲をもつ生徒
なお、②にある「自由主義」と「保護主義」を本研究では以下のように定義する。
自由主義：個人の自由な活動を主張し、国家による統制や束縛に反対するという考え方
保護主義：国家安定のために、国民の経済活動を国家が積極的に制限するという考え方

4 研究の仮説と手だて

- 【仮説Ⅰ】生徒に生まれた問いを生かして思考が連続するように単元を展開し、多面的・多角的な考察につながる学習課題を設定すれば、生徒は高い追究意欲のもとに、主体的に学びに取り組み、価値判断の根拠となる精度の高い社会認識を獲得するであろう。
- 手だて① 生徒から生まれた問いを取り上げて単元を展開する…提示する資料を工夫したり、授業終末に生徒が新たな問いを自覚する発問をしたりすることで、生徒から問いを生み出し、その問いを次の追究活動につなげる。
- 手だて② 社会的な見方・考え方に沿った複数の視点を含んだ学習課題を設定する…時期、位置、立場やそれら相互の関連など、社会的な見方・考え方に沿った複数の視点を含んだ学習課題を学級全体の中で生徒とともに設定し、共通認識をした上で追究に入る。
- 【仮説Ⅱ】明確な根拠のもとに仲間とかかわり合い、多面的・多角的な社会認識を獲得できるように適切な支援を行えば、生徒は新しい価値観に気づき、その新しい価値観に基づいてよりよい社会づくりにつながる価値判断をすることができるであろう。
- 手だて③ 思考の根拠を整理する場を設定する…歴史的分野の学習に対する苦手意識をもっている場合、かかわり合いの場での発言量の減少につながる。個人追究で得た自分の考えの根拠を整理する場を設定することで、一人一人が自信をもって自分の言葉で考えを述べることになり、質の高いかかわり合いにつながる。
- 手だて④ 把握した生徒の考えを基に、社会的な見方・考え方を働かせる教師の出を行う…個人追究によって得た生徒の考えを把握する。その後、生徒同士のかかわり合いの場を設定し、社会的な見方・考え方を働かせるよう教師の出を工夫することで、生徒が多面的・多角的な社会認識を獲得できるようにする。さらに、生徒が新しい価値観に気づいたと判断した場面で、その新しい価値観のもとに価値判断する発問をする。

5 教材について

「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」（ビスマルク）、「人類が歴史から学べることは、人類は歴史から何も学ばないということである」（ヘーゲル）、相反するように思える両者の言葉は、反芻すると、どちらも歴史を学ぶことの重要性を強く訴えていることに気づく。社会科教師としては、目の前の生徒をより「賢者」に近づくように育てたい。よりよい「人類」社会の担い手となれるように育てたい。そのためには、歴史的事象の意味を多面的・多角的に考察し、歴史に見られる課題を把握し、複数の立場や意見を踏まえて公正に選択・判断したりする力、思考・判断し議論する力を養う授業を展開する必要がある。江戸時代に発展した元禄文化と化政文化は、その発展の時期と特色に焦点をあてて追究をすることで、幕政の変化や経済・産業、交通の発展についても多面的・多角的に考察できると考えた。社会的事象の要因について、社会的な見方・考え方を働かせて、時期や位置、歴史の変遷などを関連付けて考える経験は、例えば大正デモクラシーに対し、「なぜ大正期にデモクラシー運動が盛んになったのか」の問いのように、文化と政治・経済の動向を関連付けて追究する素地になると考える。さらに、政策の意図と影響に対する多角的な追究を通して、自由な経済活動を求める庶民と、財政健全化のために石高制を守りたい幕府との思いのずれに気付くことで、平和な時代に政府はどこまで経済に関わるべきかという公民的分野にもつながる追究の視点を獲得できると考え、本単元を構想した。

6 単元目標

- 江戸時代に発展した文化に関わる資料から、文化の特色や特色を生んだ要因に関する様々な資料を効果的に調べまとめる技能を身に付けるとともに、産業や交通の発展、教育の普及と文化の広がりなどを基に町人文化が都市を中心に形成されたことと幕府政策の内容や影響を理解することができる。（知識及び技能）
- 江戸時代に町人中心の文化が生まれた要因を、都市の発展、産業の発展、交通路の整備、安定した時代の到来、幕府の経済政策の変化などに着目して多面的・多角的に考察することができる。（思考力、判断力、表現力等）
- 江戸時代に発展した文化の特色に関心をもち、意欲的に追究しようとするすることができる。また、単元を通じた為政者と庶民の思いのずれに対する気づきから、現代社会につながる考えをもとうとすることができる。（学びに向かう力、人間性等）

7 単元計画

時	「学習課題」 ○学習内容 ・生徒の思考 ◆資料	主に働かせたい、社会的な見方・考え方
1	「元禄文化には、どのような特色があったのだろうか」 ○既習の文化（飛鳥・天平・国風・鎌倉・室町・桃山）と江戸時代の文化（元禄・化政）の概要を比較し、江戸時代の文化についての問い（単元を貫く学習課題）を立てる。手だて① ・江戸の文化だけ担い手が為政者から町人に時代が変わっている。なぜ町人中心の文化が生まれたのか ◆既習の文化と江戸文化の概要（時代・担い手・特徴・代表作）一覧 ○元禄文化の概要を調べ、調べた内容をもとに元禄文化に関する問いを立てる。手だて② ・なぜ「元禄の頃に」文化が栄えたのだろう。（⇒第2時へ） ・なぜ「上方という場所で」「裕福な町人による」文化が栄えたのだろう（⇒第2時へ） ◆元禄文化の特色（代表作・作家・概要）	「これまでの文化は為政者や豪商が担い手となってきたが、なぜ江戸の文化は町人が担い手となったのだろうか」 (歴史的な見方・考え方)
単元を貫く学習課題 なぜ町人中心の文化が生まれたのだろうか 手だて①		
2	「なぜ『元禄に』『上方で』『裕福な町人の』文化が発展したのだろうか」手だて② ○元禄期に上方で裕福な町人が担い手の文化が発展した要因について個人追究をする。手だて③ ・どうしてこの時期にこの場所で文化が発展したのか自分なりの考えをもつことができたぞ。 ・他の友だちがどのような考えをもったか、聞いてみたい。 (⇒第3時へ) ◆農業や諸産業の発展のようす ◆近世の江戸と大阪の土地利用 ◆近世の交通網 ◆菱垣廻船の出船 ◆徳川綱吉から徳川吉宗の頃の幕府政治	「どうしてこの時期に文化が発展したのか」 「どうして元禄に大阪(上方)で栄えたのか」 「なぜ裕福な町人が担い手となったのか」 (歴史的な見方・考え方)
3	「なぜ『元禄に』『上方で』『裕福な町人の』文化が発展したのだろうか」手だて② ○元禄期に上方で裕福な町人が担い手の文化が発展した要因について、仲間とのかかわり合いを通して考える。手だて④ ・元禄文化の発展には、政治の変遷、経済発展の特色、交通の整備などが関係しているんだな。 ・次に栄える化政文化についても調べてみたい。手だて① (⇒第4時へ) ◆第2時の個人追究で使用した資料	「元禄文化発展の要因にはどんな要素(政治・経済・交通など)が関連し合うのか」 (歴史的な見方・考え方) 「上方がなぜ商人のまちとなったのだろうか」 (地理的な見方・考え方)
4	「化政文化にはどのような特色があったのだろうか」手だて① ○化政文化の概要を調べる。 ・なぜ「化政（文化・文政）」の頃なのだろう。（⇒第5時へ） ・なぜ「江戸で」「一般庶民によって」発展したのだろうか。（⇒第5時へ） ◆化政文化の特色（代表作・作家・概要）	「元禄文化と比較すると、発展の位置や担い手が変わっているぞ」 (歴史的な見方・考え方)
5	「なぜ『化政の頃に』『江戸で』『一般庶民による』文化が発展したのだろうか」手だて② ○文化文政期に江戸で一般庶民が担い手の文化が発展した要因について個人追究をする。手だて③ ・どうしてこの時期にこの場所で文化が発展したのか自分なりの考えをもつことができたぞ。 ・他の友だちがどのような考えを持ったか、聞いてみたい。 (⇒第6時へ) ◆徳川吉宗から水野忠邦頃の幕府政治 ◆百姓一揆・打ちこわしの発生件数の推移 ◆外国船来航の様子（位置と推移） ◆新しい学問の発展の様子 ◆渋染一揆・大塩平八郎の乱	「どうしてこの時期に文化が発展したのか」 「どうして発展の地が江戸に変わったのか」 「なぜ一般庶民が担い手となったのか」 (歴史的な見方・考え方)
6	「なぜ『化政の頃に』『江戸で』『一般庶民による』文化が発展したのだろうか」手だて② ○文化文政期に江戸で一般庶民が担い手の文化が発展した要因について、仲間とのかかわり合いを通して考える。手だて④ ・文化の発展と幕府（政府）の動きには関連性があるぞ。 ・単元を貫く学習課題を改めて整理したい。手だて① (⇒第7時へ) ◆第5時までの追究資料	「元禄の頃からの社会の変化が、化政文化発展の内容(位置・担い手・特徴)に影響しているのだな」 (歴史的な見方・考え方)
7	「なぜ町人中心の文化が生まれたのだろうか」手だて① ○なぜ江戸時代に町人を中心とした文化が生まれたのか、さまざまな理由（安定した社会や産業の発達、交通路の整備、文化発展前後の幕府政治）に着目して考察する。手だて④ ・文化の発展には、複数の要因が関連し合っているのだな。 ・政府の思惑と民衆が求めることには差が生じることが分かったぞ。もしかしたら、現代社会も同じようなことが起きるのかもしれない。その時に大切なことって、何だろう。手だて④ ◆これまでの追究資料	「為政者と庶民の思いのずれから、現代社会に活かせる考え方としてどのようなものがあるかな」 (現代社会の見方・考え方)

8 抽出生徒

【生徒A】 学習に対する関心が高く、疑問に思ったことを進んで追究し、新たな発見に歓びを感じることができる。しかし、自分の考えを他者に伝えたい思いが強すぎるあまり、他者の考えに傾聴する良さにはあまり気付いていない。そこで、生徒Aの疑問に思ったことを意欲的に追究し、新たな発見に感動できる良さを生かし、仲間とのかかわり合いを通して多面的・多角的な考察を実感する学習の場を設定すれば、自らの追究を根拠としてこだわりをもってよりよい社会づくりへの参画に思いを馳せる生徒Aの態度を養うことができると考えた。

【生徒B】 授業では、仲間の意見を聞きながら学びを進めることができる。しかし、考えに自信が持てず、仲間の意見を聞くまで自分の考えを持ったり述べたりすることを躊躇する傾向が見られる。そこで、課題解決のために仲間とかかわることのできる生徒Bの良さを生かし、思考の根拠を整理する場を設定した後に仲間とかかわり合う活動を行えば、根拠を明確にして自信をもった価値判断ができ、新しい価値観を実感することにつながる追究をすることができると思った。

9 研究の実践と結果

(1) 第1時「元禄文化にはどのような特色があったのだろうか」(手だて①)

第1時、既習の文化〔飛鳥・天平・国風・鎌倉・室町・桃山〕と未習の文化〔元禄・化政〕について「時代・担い手・特徴・代表的な文化財」を一覧にした資料を配付した。生徒が担い手の違いについて問いをもつことをねらった（手だて①）。生徒Aは「なぜ担い手が町人になったのか」生徒Bは「今までは位の高い人が担い手だったけど、町人が担い手にな

るのは江戸が初めてだからそれを調べたい」と問いをもった。学級全体でも同様の問いをもった生徒が多かったため、教師はそれを取り上げた（手だて①）。生徒とともに単元を貫く学習課題「なぜ町人中心の文化が生まれたのだろうか」を設定した。その後、「まずは、先に発展した元禄文化から調べたい」という声が生徒から上がったため、教師はそれを取り上げて元禄文化について詳しく調べることとした（手だて①）。生徒は元禄文化について、発展した時期や担い手、代表作や特色について調べた。その後教師は、「今日の追究から、どんな『？』（ハテナ）が生まれましたか」と発問した。

【資料1】第1時生徒A・Bが立てた問い [生徒A] ・なぜ綱吉の時代に文化が始まったのだろう。 ・なぜ将軍のいる江戸ではなく、今の大阪や京都で元禄文化が栄えたのだろう。	[生徒B] ・綱吉の時代は1680年～1709年。元禄文化の発展は1688年から1704年頃が最も栄えた。元禄文化の発展は綱吉の時代のちょうど真ん中。なんだろう。何か関係があるかも。 ・なぜ町人が経済力をつけたのだろう。そして、経済力を付けたからといって、それが文化の担い手になることとどう関係しているのだろう。
---	--

【資料1】の下線部は「時期」、点線部は「位置」、二重線部は「立場や相互関係」について問いをもったことがわかる。
(2) 第2時「なぜ『元禄に』『上方で』『経済力のある町人による』文化が発展したのだろうか（個人追究）」（手だて①②③）

第2時の追究内容につなげるために、第1時で生徒から生まれた問いを共有した（手だて①）。生徒は【資料1】のような「時期」「位置」「立場や相互関係」に関する問いを挙げた。教師は、生徒から出た問いを生徒とともに整理し、学習課題を「なぜ『元禄に』『上方で』『経済力のある町人による』文化が発展したのだろうか」と設定した（手だて②）。P2の単元構想の学習課題から変更している（裕福な町人→経済力のある町人）のは、生徒の言葉を生かしたためである。第2時は、学習課題に対する個人追究を行った。生徒は、考察した一つの要因に対して【資料2】のシート（カード）を作成した。生徒Aは5つ、生徒Bは4つの考えをもつことができた。

生類憐れみの令で平和な世の中が続いたから

綱吉が生類憐れみの令で殺生を禁じ、荒々しい社会の気風を正そうとし、平和な世の中が続いたから（P128の資料③）

【資料2】スクールタクトのシートの例（生徒Bのもの）

【資料3】第2時の生徒A・Bの追究(元禄期に上方を中心として経済力をもった町人が担い手の文化が栄えた要因)	
[生徒A] (番号は筆者記入) ①元禄期に農業が発展したから ②鉄製の農具が開発され、農業の効率が良くなったから ③農民が商品作物を売り、町人の経済力が上がったから ④上方は日本の中心に位置し、物流が盛んだったから ⑤綱吉の後、新井白石の政治によって、町人の経済力が落ちてしまったから元禄期までで文化の発展が終わった	[生徒B] (番号は筆者記入) ①古くから、上方が日本の政治の中心地であり、そのために江戸よりも人口が多かったから ②幕府の安定した政治によって、町人が台頭したから ③平和的な政治によって、農村の商品作物生産が向上して経済力がついたから ④綱吉の生類憐れみの令の影響で、平和な世の中が訪れ、人々に文化を楽しむ余裕が生まれたから

生徒Aは農業の発展と元禄文化発展の関連に気付いている（生徒A①②）のに対して、生徒Bはその点は薄い。同様に、生徒Bがこの時代以前の歴史的事象との関連を要因として挙げている（生徒B①）のに対して、生徒Aは気付いていない。また、生徒Aは文化終焉の要因を新井白石の政策に見出した（⑤）一方で、生徒Bは文化発展の要因と綱吉の政治との関連性（④）に気付いていることがわかる。

【資料4】第2時生徒Bの授業感想 [生徒B] 自分の考え一つに対して、スクールタクトのシートを一枚ずつ作っていくから、 <u>どうして自分がその考えを持ったのかが蓄積していく感じがして、自信がもてた。自分が気付いていない考え方に気付いている子もいるだろうから、他の子の考えを聞いてみたいし、自分の考えも聞いてほしい。</u>

生徒Bの「どうして（中略）自信がもてた」「他の子の考えを聞いてみたいし、自分の考えを聞いてほしい」からは手だて③によって、生徒Bが個人追究に対する苦手意識を減少させ、仲間とのかかわり合いに意欲的になっている姿を捉えることができる。学級全体（35人）では、127枚のシートが作成された。一人あたり3.6枚となる。手だて④の一環として生徒の考えを把握すると、主な考察として学級全体の生徒は【資料5】のような考えを持っていることがわかった。

【資料5】第2時 個人追究の生徒の考察（学級全体）		
元禄期に文化が発展した要因	上方で文化が発展した要因	経済力のある町人が担い手となった要因
①徳川綱吉の政治により、戦乱のない世の中となり、人々に文化を楽しむ余裕が生まれた。 ②新田開発と農業生産技術の発達により、この頃生産力が向上した。 ③新井白石が貨幣の質を戻したことで、経済状況が変わり文化の発展が終わった。 ④徳川吉宗の政治により一般庶民は生活が苦しくなり、文化を楽しむ余裕がなくなった。	⑤古くから政治・経済の中心地であり、この時代は江戸よりも人口が多かった。 ⑥三都が発展した。中でも江戸は武家屋敷が多いのに対して、上方は町人屋敷が多い。 ⑦陸路、海路の交通網発達により、上方に諸国の産物が集まった。 ⑧蝦夷地や琉球王国との交易が安定し、上方に物資が集まった。	⑨金山や銀山の開発で貨幣が多く造られるようになり、貨幣経済が発展した。 ⑩綱吉が貨幣の質を落としたことで、物価が上がり貨幣を多く手にすることができた。 ⑪商品作物を都市に売ることによって町人が貨幣を手にした。 ⑫株仲間によって一部の町人が大きな利益を得ることができた。

【資料5】④にある徳川吉宗の政策にまで追究の範囲を広げた生徒は学級で1名であった。教師は、【資料4】の「他の子の考えも聞いてみたい（略）」を取り上げて（手だて①）、【資料5】①から⑫のような考察やその関連について、新たな考えに触れることが、多面的・多角的な考察につながると判断し、学級でかかわり合う場をもつことにした。

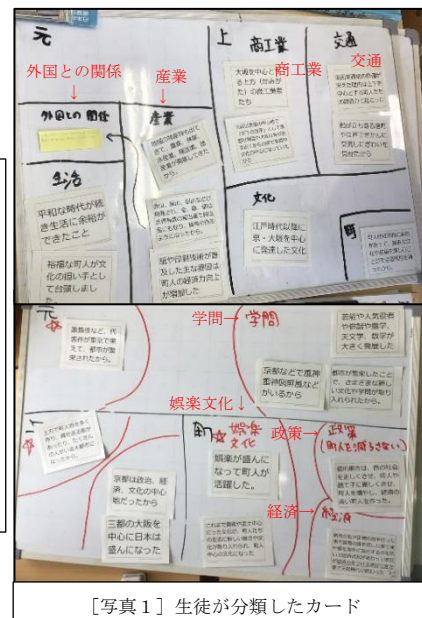
(3) 第3時「なぜ『元禄に』『上方で』『経済力のある町人による』文化が発達したのだろうか（チーム・学級でのかかわり合い）」（手だて①②④）

第3時、前時に生徒が考えを記入したシート（【資料2】）のうち、右上のピンク枠の部分をカードにして配付した。

【資料6】第3時の授業記録（前半）	
T1	自分がカードに記した考えを、根拠とともにチーム（＝4人程度の小集団）で伝え合ひましょう。チームでは、その考えが、学習課題に対して適切なものかどうか、判断しましょう。適切だと判断したら、カードを仲間分けしましょう。 (チームで前時の考えと根拠を伝え合う) (中略)
C24	これ、全部が関連し合っているから、「元禄」「上方」「経済力のある町人」という分類じゃない分類の方が分かりやすいんじゃない？
T8	どういこと？
C25	このカードは「交通」という分類になるし、こっちは、「産業」という分類になる。
T9	じゃあここは？
C26	この仲間は…「政策」だな。これは「経済」。

T1の発問の後、生徒は前時の個人追究で得た自分の考えを、根拠を示しながら説明し合った。その過程で、前時に見られた「事実誤認のある考察」は淘汰されていった。カードの分類については、ほぼ全てのチームが「元禄に」「上方で」「経済力のある町人の」という3つに分類していた。

その中で、教師はC24「全部が関連し合っているから」「じゃない分類の方が分かりやすい」という生徒の発言を聞いた。教師は、多面的な認識を獲得することにつながると判断しT8、T9の出を行った（手だて④）。結果、C25「交通」「産業」C26「政策」「経済」という分類がなされた。この時に分類されたカードが右[写真1]である。教師は[写真1]の分類をしたチームを全体に紹介し、「これを生かすとどんな分類ができそうですか」と発問した（手だて④）チームの学びを見取っていた教師は、幕政の内容と影響、特に綱吉以降の政策についての認識が薄いと判断した。そこで、手だて④として【資料7】T18の教師の出を行った。



[写真1] 生徒が分類したカード

【資料7】第3時の授業記録（後半）
 （どのチームも「経済」「海外との関係」「交通網の発達」「政策」など、これまでにない面からカードを分類し、この時期に上方で経済力をもった町人による文化が発展した要因を多面的に考察している様子を教師が見取る）

T18 みなさんちょっと聞いて。チームCは「この時期に発展した理由」ではなくて、「この時期にしか発展しなかった理由」について意見を出し合っていたよ。みんなのチームはそういう視点あった？

C45 なかった。ちょっとどういうことか聞いてみたい。（その他多くのチームが同様の回答）

T19 生徒Cさん説明できます？

生徒C 新井白石の政治が関係していると思うんです。新井白石の政策は、商売より米作り優先で、その結果、町人にはゆとりがなくなったんです。文化を楽しむゆとりが。お金が動かなくなったから。だから経済力をもった町人が減っていったのだと思います。それで、新井白石の後に徳川吉宗の登場で元禄文化が発展する要素が完全に終わったと思いました。

結果、C45のように生徒の追究意欲が刺激されたため、同じく手だて④として、T19で生徒Cを指名した。生徒CはP6【資料5】④にて学級で唯一徳川吉宗の政策について追究していた生徒である。この教師の出によって、生徒Cは徳川吉宗の政策の内容と元禄文化の関連性について言及した。【資料8・9】は授業終末の生徒の考察と感想である。

【資料8】第3時の終末の学習課題に対する生徒A・Bの考察のうち、第2時(【資料3】)では見られなかったもの	
【生徒A】 ①東海道や中山道などの五街道をはじめ、主要な道路が整備された。 ②綱吉の政策によって貨幣価値が下がって物価が上がり、町人が多くの貨幣を手にした。 ③幕府が大切にしていたのは「米」の政策。町人にとって大事だったのは「お金」を稼ぐ。この違いによって、元禄文化は栄えなくなった。	【生徒B】 ①農具の進化によって、農村の商品生産が上がり、この流通によって、経済力が上がった。 ②新井白石が税を重くしたことで、町人の経済力が落とされたことで文化が終わってしまった。 ③交通網の整備によって、上方が流通の中心地となったことによって上方で文化が発展することになった。

【資料9】第3時の授業感想（一部抜粋）

【生徒A】幕府などがとった「政策」から、どんな人にどんな「影響」が及んだのかを考え、それがどのような「原理」で促されているのか、その「手段」を考え、その当時の「環境」「立場」「心情」を考え、どう変化したのかを「比較」としてより深い考察ができると知りました。徳川吉宗がどのような政策をとり、元禄文化にどのような影響を与えたのかは、まだわからないので、今度調べたいです。

【生徒B】町人からの目線、幕府からの目線、場所、経済などいろいろな視点から一つの疑問に対して考えることができました。幕府にとっては、秩序を大切に政策を採りたかったのだけど、それによって町人が経済力をつけることになって、上方を中心に元禄文化が広がったので、二つの視点から考えることが面白い発見につながると分かりました。

【資料8】生徒A③「この違い」と、【資料9】生徒Aの「『政策』から（中略）『立場』『心情』を考え、また生徒Bの「町人からの目線、幕府からの目線」「二つの視点から考える」からは、為政者と民衆双方の立場から多角的に考察する重要性に気付く生徒の姿を捉えることができる。また、生徒A「『比較』するとより深い考察ができる」生徒B「場所、経済などいろいろな視点から」の記述や、【資料8】において、前時(【資料3])にない新たな考察があることから、多面的な認識を獲得したことがわかる。

(4) 第4時「なぜ元禄文化は、元禄の頃に『しか』栄えなかったのか」(手だて①④)

【資料9】生徒Aの点線部「徳川吉宗がどのような政策（中略）調べたい」にあるように、生徒が幕政の内容に対する追究への不十分さを自覚し、問いをもった姿を捉えた教師は、単元計画(P2)を変更し、生徒が生んだ問いを取り上げて幕府政策について追究することにした(手だて①)。前時の追究、P2【資料7】T18の場面を想起し、学習課題を「なぜ元禄文化は、元禄の頃に『しか』栄えなかったのだろうか」と設定し、綱吉、白石、吉宗の政策の詳細(貨幣政策などの金融政策・享保の改革・産業や農村への影響)と、政策が、元禄文化盛衰とどのように関連しているのかを追究した。

【資料10】第4時の授業感想

【生徒A】新井白石の政策で貨幣の質を戻して商人の生活が苦しくなった。その後、徳川吉宗によって税の取り立てや生活の制約があり、(中略)文化を発展させる余裕がなくなり、元禄文化は終わったと考えた。幕府としての利益は年貢、つまり「米」。庶民を米作りに集中させてく政策を行っている。でも、庶民にとってはそのような政策に対しては損が大きい。このような感覚の違いは、次の化政文化にも関係しているかもしれないから、まずは化政文化の内容を調べてみたい。

【生徒B】綱吉の時代に貨幣の質が落とされたものが元の貨幣の質に戻された。これで商人もお金に余裕があるわけではなく、税も重くして、今まで余裕があった町人にも余裕がどんどん無くなった。でも、幕府は財政を取り戻したいから、幕府がしたいことをバンバンやっていった。幕府の財政は一時的に立ち直ったけど、町人は納税に精一杯だから、文化の発展が終わってしまったのだと分かりました。

生徒Aは前時の問いから徳川吉宗の政策について追究したことで、下線部「徳川吉宗によって(略)」のように吉宗の政策と元禄文化との関連性について考えることができた。点線部「幕府としての利益は(中略)庶民にとっては(中略)損が大きい」(生徒A)「幕府は財政を取り戻したい(中略)町人は納税に精一杯だから、文化の発展が終わってしまった」(生徒B)からは、文化を切り口とした政策の意図と影響への多角的な考察により、保護主義と自由主義の間に生じる摩擦に気付く生徒の姿を捉えることができる。

(5) 第5時「化政文化にはどのような特色があったのだろうか」(手だて①)

P4【資料10】生徒A太線部を取り上げて、化政文化の特色について調べることとした(手だて①)。生徒は元禄文化の時(P3第1時)と同様に、発展した時期や担い手、代表作や特色について調べた。【資料11】生徒A・Bの下線部は「時期」、点線部は「位置」、二重線部は「立場や相互関係」について問いをもったことがわかる。さらに、太線部は生徒A・Bともに元禄文化についての追究を生かして、化政文化についての考察に仮説を立てていることがわかる。

(6) 第6時「なぜ『化政に』『江戸で』『一般庶民による』文化が発展したのだろうか(個人追究)」(手だて①②③)

第6時の追究につなげるために、第5時で生徒から生まれた問いを共有した(手だて①)。生徒は【資料11】生徒A・Bのような「時期」「位置」「立場や相互関係」に関する問いを挙げた。

そこで教師は、それら生徒から出た問いを、生徒とともに整理し、学習課題を「なぜ『化政に(文化・文政の頃の意)』『江戸で』『一般庶民による』文化が発展したのだろうか」と設定した(手だて②)。学習課題に対する個人追究では、元禄文化の時と同形式のシート(【資料2】)を用いて生徒が思考の根拠を明確にできるようにした(手だて③)。

【資料11】第5時の生徒A・Bが立てた問い	
〔生徒A〕 - なぜ19世紀前半のこの時期に発展したのか - 経済的に発展した江戸で発展したのは分かったがなぜ江戸が経済的に発展したのか - 経済的に発展している江戸が文化の中心なのに、担い手が庶民なのはなぜか - 前回(元禄文化)は戦争がないことで町人に文化を楽しむ余裕が生まれたことで発展した。ということは、化政文化の頃は、庶民にも文化を楽しむ安定した生活があったのではないのか	〔生徒B〕 - なんでこの時期に化政文化が発展したのか - どうして江戸で発展したのか →幕府が税によって立て直したから、幕府の政治が安定して、庶民に暮らしに余裕が生まれたのかもしれない。 - 元禄文化の頃と変わって、なんだか「大人しめ」な文化財が多い。それはなんだろう。庶民が担い手なのと関係しているのかもしれない。 - 代表作の中に幕府を批判するものがあるのは、当時の政治と関係しているからかもしれない。

【資料12】第6時の生徒A・Bの追究(化政期に江戸を中心として一般庶民が担い手の文化が栄えた要因)	
〔生徒A〕(番号は筆者記入) ①松平定信による一般庶民への厳しい政策が終わり、庶民のストレスや不満が爆発したから。また爆発させる余裕もあったから ②この頃に、一般庶民が不満を募らせる政策や状況が増えたから。(ききんや外国船の来航など) ③このころには上方よりも江戸の人口が増えており、「100万人都市」と言われる程、江戸が発展したから	〔生徒B〕(番号は筆者記入) ①江戸の経済が発達したから ②幕府の権力が衰えてきたから、幕府を批判する書物などの文化物が栄えた ③国学、蘭学、寺子屋などが発展したことで、庶民にも教育が広がり、庶民も文化を楽しめるようになった ④「貸本屋」「版画」はともにかかる費用が少ない。つまり、庶民にも親しめるものだった ⑤化政の少し前に行われた寛政の改革による庶民への引き締めで庶民にうつぶんがたまっていたから

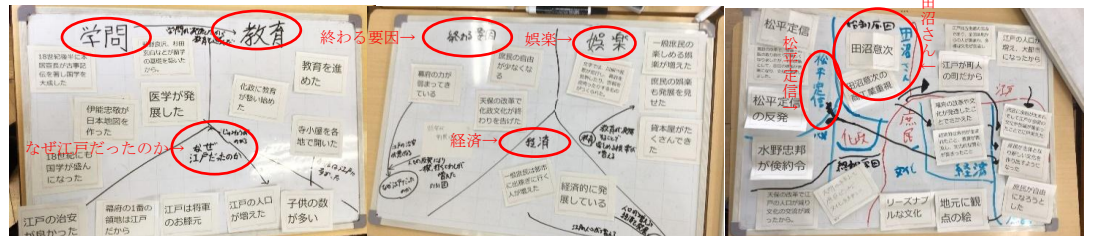
学習課題に対する考察として、生徒Aは3つ、生徒Bは5つの考えをもつことができた。生徒Aの①②は、政策や社会状況が文化発展の要因や内容に影響を及ぼすことを認識している姿が表れている。また、生徒A③は都市発展の推移や変遷を追う社会的な見方・考え方を働かせている生徒Aの姿を捉えることができる。生徒B③の教育の広がりや文化の発展を関連付ける考察は生徒Aは未獲得の考察である。また、生徒B④の考察は、代表的文化財の特色から、一般庶民が担い手となった要因を導き出す考察である。学級全体(35人)では181枚のシートが作成された。一人当たり5.2枚となる。元禄文化の時の考察(学級全体127枚、一人当たり3.6枚)と比較し、大幅な増加が見られた。手だて④の一環として生徒の考えを把握すると、主な考察として学級の生徒は【資料13】のような考えをもっていることがわかった。

【資料13】第6時 個人追究の生徒の考察(学級全体)		
化政期に文化が発展した要因	江戸で文化が発展した要因	一般庶民が担い手となった要因
①田沼意次の年貢に頼らない商工業重視の政策により、経済、学問が発展し、文化発展の芽が出た ②田沼の後の松平定信の寛政の改革(商品作物の制限・農民の帰村など)によって、庶民に不満がたまり、不満の爆発が化政期に文化として起こった ③定信の後の徳川家斉の頃、庶民に対する締め付けが少なく、この時期に文化が発展した ④水野忠邦の天保の改革で政治批判の禁止、出版の取り締まりなどがなされたことにより、化政文化は終わった	⑤この頃には上方の人口よりも江戸の人口が多くなっていた ⑥江戸が経済的に大きく発展していた ⑦社会が安定していたため人の往来も比較的自由にできるようになり、働く利点が大きく江戸に人口が集中していた ⑧蘭学、国学など、学問や情報の中心地が江戸であった	⑨商品作物の制限や倭約令、借金帳消し、株仲間解散など、町人(商人)の力がそがれる政策が続いた ⑩庶民の間に教育への関心が高まった ⑪藩校、私塾、寺子屋などにより、実用的な知識・技能の習得を可能にする教育の広がりがあった ⑫外国船の接近などが増加し、その対応について庶民の間でも幕府への不満が高まっていた ⑬小林一茶の素朴な作品など庶民に寄り添うような文化物が流行した ⑭貸本屋、版画などは少出費で楽しめるものであった

【資料13】④にある水野忠邦の政策と化政文化発展との関連性について考察した生徒は学級で14名であった。一方で、生徒A・Bは水野忠邦や田沼意次の政策と文化発展との関連について考察していない(【資料12】【資料13】)。このことから、生徒がかかわり合うことで個人追究の不十分さを補い、より多面的・多角的な考察につながると教師は判断し、かかわり合う場をもつことにした。

(7) 第7時「なぜ『化政に』『江戸で』『一般庶民による』文化が発達したのだろうか(チーム・学級でのかかわり合い)」(手だて①②④)

前時の個人追究の考えをカードにしたもの(【資料2】と同様の形式)を配付した。生徒はチームで、カードに書かれた考えとその根拠を説明し合い、その考えが化政期に江戸で一般庶民を担い手とする文化が発展した理由として適切かを判断し、分類していった。[写真2]を見ると、生徒は「学問」「教育」「なぜ江戸だったのか」「終わる要因」「娯楽」「経済」「松平定信」「始まりの原因・田沼さん」と、化政期に江戸で一般庶民を担い手とする文化が発展した要因を多面的に考察することができている。各分類が矢印で結ばれていることから、それぞれの要因についての関係認識を深めていることも分かる。前時の考えと本時でのチームの追究過程を把握していた教師は、生徒Aのチームが天保の改革との関連にまで考えが及んでいることと、生徒Bのチームで生徒Bのみが貸本屋や版画が流行したことと一般庶民が担い手となったことの関連性に気付いている状況を捉え、手だて④として生徒A・Bのチームをつなげた。【資料14】はその時の授業記録である。



【写真2】生徒が分類したカード(赤丸は筆者)

【資料14】第7時の授業記録(生徒Aのチームと生徒Bのチームをつなげた場面)	
T20	(生徒Aのチームと生徒Bのチームをつなげて) 生徒Bさんが文化の代表作に「貸本屋」「版画」があることと一般庶民が担い手であることに関係があるって考えているんだけど、生徒Bに聞いてみる?
C	聞きたい! どういうこと?

生徒B 1	貸本屋は「買う」んじゃなくて「借りる」んです。つまり、今でも本屋さんで本を借りるより、図書館に行った方がお金はかからないですよ？当時は今より本は貴重だったはずだから、お金がかからないかはわからないけれど、買うよりは絶対安い。だから庶民でも親しめるんです。寺子屋とかあるから文字読めるし。版画も同じで、 <u>小学校で版画したときのことを思い出して見て。何枚も刷れるでしょ？同じものを。だから、一枚はそこまで高価じゃなかったはず。つまり、庶民でも文化を楽しめる。だから一般庶民が担い手となれたんです。</u>
生徒A 1	なるほど！その考えはなかった！ <u>文化の内容と、担い手が誰であったかって関係あるってことか。</u>
T 21	生徒Bのチームは「水野忠邦」っていう人物は出てきていないんだけど、水野忠邦はどう関係しているの？（生徒Aのチームに問いかける）
生徒A 2	じゃあ今度は私たちが説明しますね。まず水野忠邦がした天保の改革について <u>説明</u> します。 （生徒Aを中心に、生徒Bのチームに天保の改革の内容を説明する） で、どこかが化政文化と関係しているかというところ、「享保の改革と寛政の改革を手本にして」と教科書にある（東京書籍「新しい社会歴史P136L17」を指す）けど、これ手本にすると、庶民は苦しいですよ。その証拠にほら、「俵約令」「小説の出版を禁止」「株仲間の解散で大混乱」と続く。ほら、こうなったら文化の発展は終わっちゃうじゃないですか。 <u>元禄文化の時と同じで。幕府がいろいろ引き締めて、文化を楽しむ側の人に余裕がなくなると、文化って終わっちゃうんですよ。</u>
生徒B 2	すぐく分かりやすい説明だった。（その後、生徒Bのチーム内で） 今日はもう時間がないけど、これで元禄文化も化政文化も考えたから、 <u>単元を貫く学習課題に戻って自分なりの結論を出したい。</u>

T 20の教師の出（手だて④）によって、生徒Bは自分の考えを「本屋さんで（略）…」と自分の生活体験をもとに説明することができた。この生徒Bの説明が生徒A 1の「文化の内容と、担い手が誰であったかって関係ある」という認識につながった。さらにその後T 21で生徒Aのチームに水野忠邦の話題を振ったことで、生徒A 2の「天保の改革について説明」がなされて、生徒Bも水野忠邦の政策の内容と化政文化との関連に触れることができた。

（8）第8時「なぜ町人中心の文化が生まれたのだろうか」（手だて①・④）
単元の終末として、【資料14】生徒B 2の下線部の意見を取り上げた（手だて①）。生徒はこれまでの追究を整理し、町人中心の文化が生まれた要因についてチームと学級全体で話し合った。

【資料15】第8時（単元終末）の授業感想（どちらも長文であるため、一部抜粋） [生徒A] まず元禄文化は、農業技術の発達により、商品作物を栽培する余裕ができ、貨幣を手にする中で貨幣経済が広がり、町人が担い手となっていった。化政文化は、政権を握った人物が変わったことと当時の状況により、庶民の間に幕府に対するストレスが溜まって、それを解消する力を生かして発展していった。庶民らの目指す考えと、 <u>幕府が目指す考えは一致しない。だから庶民は幕府を批判する文学作品を作っていた。</u> [生徒B] 幕府は財政を立て直したり発展させることに注力していたけど、その隙に町人が独自の文化を作り発展させていったことがわかった。綱吉が貨幣価値を下げたら思惑とは違って商人が経済力をつけて町人の文化（元禄文化）を発展させたけど、新井白石が貨幣の価値をリセットしたことで町人は経済力を落として文化は失速してしまった。松平定信の農村立て直しの政策は、米を蓄えたい思いだから、庶民は不満もたまって苦しいけど、その中でも人々は貸本屋や版画などを使って「コスパ」のいい文化を流行させたんだなと分かりました。 <u>町人の経済力に貢献する政策と、幕府の年貢力を中心に考えている政策とが、なんだか交互に行われていることが分かりました。</u>
--

生徒A・Bの下線部のように、自由な経済活動を求める庶民と、財政健全化のために石高制を守りたい幕府とでは、思いにずれが生じるという新しい価値観に気付いた生徒を捉えた教師は、手だて④として、「この単元の『これからに生かせる学び』としてどんな考え方をもちましたか」と発問した。【資料16】は発問の後の生徒の授業感想である。

【資料16】第8時（単元終末）の授業感想 [生徒A] 庶民らが目指すことと、幕府が目指す考えは必ずしも一致しないということが分かった。（中略）これから分かることは、 <u>政府が考える「これはいい。これはダメ」と国民が考える「これはいい。これはダメ」をより一致させていくことが重要だということ。</u> 例えば、国民が「〇〇ハラスメント」で困ることが多いとしたら、その声を政府に届け、政府としては法律を作ったり、モラルの向上を呼び掛けたりすることが大切。つまり、基本的には庶民の立場だから、「政府がやることに興味がない」「批判や不満の声を届けない」ということが庶民としては一番だめな態度で、自分としては、ちゃんと選挙に行くなどの声を届ける行動をしていきたい。 [生徒B] 政策をする、政策を考える側の人には、幕府の経済を立て直したいい思惑があったり、政治の引き締めをしたい思惑があったりする。でも、それぞれの政策は、 <u>幕府にとってのメリット・デメリットを生んでいるのと同時に、町人にとってのメリット・デメリットにもつながっていることがわかった。</u> 現代につながる考え方としては、政策をする側にねらいがあるからOKということではなくて、 <u>それが町の人にとってどんなメリット・デメリットがあるのかを、町の人側の視点で考えないといけない</u> ということがわかった。でも、今は「政策をする側のねらい」も、「町の人側として考えたとしてその後どうすればいいか（選挙?）」も <u>分からないから、そういうこともこれから勉強していきたい。</u>

生徒A・Bの下線部からは、為政者の視点・庶民の視点から政策の影響を多角的に考察する重要性に気付く生徒の姿を捉えることができる。また点線部のように、国民としての立場からよりよい社会づくりに関わっていく責任を実感している。さらに、太線部の意見は、よりよい社会づくりへの参画の在り方について思いを馳せる生徒A・Bの姿といえる。

10 実践の考察

【仮説Ⅰ】について 手だて①では、第1時に生まれた問いを単元を貫く課題として位置付けたことで、【資料4】に見られる生徒Bの主體的な姿や、【資料5】では農業発展や物流など単一の要因に着目した考察が中心であったが、【資料8】では為政者と町人の立場の違いに着目した考察が見られた。このことから、生徒は複数の視点を関連付けて社会的事象を捉えることができるようになったと考えられる。また、幕政の追究を取り入れたことで、【資料10】では政策の影響を認識する生徒の姿が見られた。さらに、化政文化の追究では【資料13】の充実した個人追究や【資料14】の対話的な学びにつながり、試行錯誤しながら社会認識を深める姿が確認できた。 手だて②では、「時期」「位置」「立場や相互関係」の視点から追究したことで、【資料5】の多様な考えや【資料8】の新たな考察が生まれた。また、【資料13】の個人追究や【写真2】に見られる多面的・多角的な考察を通して、【資料15】では文化の発展要因や幕府と庶民双方の思いを捉える高度な社会認識につながった。
【仮説Ⅱ】について 手だて③では、【資料2】や化政文化の個人追究を通して、自分の考えを根拠とともに整理する力が育まれた。結果、【資料4】の「聞いてみたい」「聞いてほしい」という姿、【資料8】【資料9】の多面的・多角的な考察が生まれた。また、【写真2】や【資料14】では認識を深め合う姿が見られた。【資料15】では新たな価値観への気付きにつながった。 手だて④では、【資料6】【資料7】に示される教師の働きかけが、【資料8】【資料9】の考察の深化につながった。さらに、【資料12】【資料13】を踏まえた教師の出により【資料14】の説明や対話が促され、【資料15】に見られる新たな価値観への気付きを基に、【資料16】ではよりよい社会づくりへの責任や参画の在り方について考える姿が見られた。本実践を通して生徒は、幕府の政策を単に「よい」「悪い」で判断するのではなく、幕府側にも財政再建という意図があり、町人側にも生活や経済活動を維持したい思いがあることに気付いた。このような為政者と庶民双方の立場から社会的事象を捉える見方は、生徒にとって新しい価値観であったと考える。

これらの生徒の変容から、研究の仮説に基づく具体的な手だて①から手だて④は有効であったと考える。